

# 観智院本『類聚名義抄』の問題訓について

林 楚 宜

## 1 はじめに

日本古辞書の歴史は一般に平安時代に始まると言える。平安時代の代表的な古辞書は『新撰字鏡』『和名類聚抄』『類聚名義抄』である。その中の『類聚名義抄』は平安時代末期に成立した漢字を部首により分類した漢和辞書であり、日本語史において重要な存在である。

『類聚名義抄』には古い形態を持つ原撰本系『類聚名義抄』(以下、単に「原撰本系」と呼ぶ)と、そこから改編された改編本系『類聚名義抄』(以下、単に「改編本系」と呼ぶ)の二種が残存している。図書寮本『類聚名義抄』は原撰本系の唯一の伝本であり、現存本は「法上」一帖の零本である。改編本系は、観智院本、高山寺本、蓮成院本、西念寺本が現存し、これらのうち観智院本は唯一の完本である。

改編本系に関しては、その異本の多さから、諸本の分類・系統に関する研究が多く、部首配列や少数の部をサンプルとした掲出字配列・和訓についての調査が行われてきた。一方で、それぞれの本の全巻を通した量的調査に基づいてその特徴を明らかにしようとした研究は少ない。これには、改編本系の諸本の掲出漢字・和訓数の多さ、文字同定の難しさ、伝存状況からの影響関係についての分量の違いなど、様々な理由があったものと考えられる。

改編本系は原撰本系を下敷きとするが、原撰本系に比べると、和訓は4.1倍に増加し(池田2008)、和訓数は35,385語(草川2002)である。しかしながら、和訓の掲出状況についてまだ明らかになっていない部分が多く存在し、標出漢字と和訓が結び付かないものが見当たる。特に改編本系を比較した際に、同一掲出文字に対し和訓が一致しないものもある。例えば人部の「アカラサマ」は、祖本のままであるのか、書字者の誤りであるのか、未だ解明されていない<sup>1</sup>。

和訓	観智院本	蓮成院本	高山寺本	西念寺本	掲出字
アカラサマ	アカラシマニ	アカラサマニ	アカラサマニ	アカラシマニ	倏忽

本稿は、「アカラシマニ」のような標出漢字と和訓が結び付かないもの・誤記を「問題訓」と呼ぶことにする。さらに、以上のような状況を踏まえて、観智院本の問題訓に注目し、誤写の原因・成立過程や古訓の原拠・由来の解明を目指す。

## 2 先行研究

### 2.1 先行研究の概観

まず、改編本系『類聚名義抄』諸本の研究の中で、観智院本がどのように扱われてきたかを確認する。

改編本系の研究としては、岡田(2004)、中田(1955)と草川(1990)に詳しい。改編本系『類聚名義抄』は十二世紀後半、1200年ごろの成立と言われる。改編本には観智院本、高山寺本、蓮成院本、西念寺本が知られている。観智院本は唯一の完本であり、ほかのいずれも零本である。改編本系は原撰本系の仏教事典的要素を削り、原撰本の漢文注を省略し、万葉仮名を片仮名に改め、片仮名注を増補している。

次に、観智院本自体についての研究を紹介する。

書誌的な情報については、大槻(2018)に詳しい。本稿で使用した新天理図書館善本叢書に基づいて観智院本の構成について簡単に述べると、仏法僧の3巻構成であり、仏法僧それぞれを上中下に分け、仏下についてはさらに二分して本・末としている。

観智院本のテキストを他本と比較すると、観智院本に誤写と考えられるものが少なくないことが知られている。観智院本の誤写に関しては、岡田(2004)、中田(1955)と草川(2002)で言及されている。中田(1955)では「観智院本に誤写が多く、解義に難があり、このまま信ずるならば、大きな誤謬となるものがある。誤写の多いことは、すでに仁治二年の書写の識語によっても察知できる。異体仮名の読み誤り、書き誤りも多い」と述べている。類聚名義抄における誤字訓について、草川(2002)は「誤字訓と思われるものも四本それぞれに見られ、どの本が多く、どの本が最も少ないかということは軽々にはいえないようである」のように指摘している。

また、西端(1971)では、仏上・仏中の二つの篇目を中心に、出現した誤写を以下の四種類に分けている。

- ①誤字：(例) 適 【観】アキナフ 【高】アアナフ 【蓮】アマナフ
- ②脱字・衍字：(例) 喘 【観】アク 【高】アハク
- ③語の複合と分離：(例) 在 【観】アリマシマス 【高】アリ マシマス
- ④語内部での文字のいれかわり：(例) 務 【観】アナツル 【蓮】アツマル

最後に、観智院本に残された大きな課題についても触れておきたい。大槻(2018)では改編増補の過程を明らかにすること、見出、和訓注、字音注などの典拠を明らかにすること、改編本諸本の関係、先後、形成過程を明らかにすること、3つの課題が挙げられている。

## 2.2 問題点

以上、観智院本及び観智院本における問題訓に関係する先行研究をまとめた。ここでは、残された問題点を示す。

第一に、和訓の問題訓に関する量的調査が行われていない。少数の部をサンプルとした和訓についての調査により、全本における問題訓の数値を推測することが可能であるが、その割合、また観智院本以外の改編本との対照については全く不明である。

第二に、篇の違いに注目した問題訓に関する質的調査がまだ行われていない。今まで西端（1971）と中村（1987）の問題訓に関する体系的な研究と草川（2002）の字書の面から見る和訓の研究が行われてきたが、仏法僧それぞれの問題訓に関する情報が十分でない。

観智院本『類聚名義抄』が改編本系に唯一の完本としてよく取り上げられるものの、それを利用する際に問題訓のまま引用される場合も少なくない。観智院本『類聚名義抄』を活用し、和訓の研究を進めるために、問題訓を見直しておくことが必要である。

本稿は、これらの問題を解決することを目的として、まず全巻を通して問題訓に関する量的調査を行い、観智院本における問題訓の記載状況を明らかにする。そして、改編本系諸本を対照する上で、問題訓に関する質的検討を行い、問題訓を分類しそれぞれ例を挙げて考察・分析する。

## 3 資料

### 3.1 調査対象

本稿では、改編本系観智院本における問題訓を対象とする。問題例については、草川（2000）の『五本対照 類聚名義抄和訓集成』を利用し、観智院本ア～ワまで計 35,385 語に出現した問題訓を中心として調査する。

数ある改編本系『類聚名義抄』諸本の中から観智院本を対象とする理由としては、その和訓注の豊富さである。観智院本の注文には最も豊富な和訓注があり、現存部首数も 120 があり、改編本系における唯一の完本である。観智院本のテキストを他本と比較すると、観智院本に誤写と考えられるものが少なくないことが知られている。そのため、観智院本の利用にあたっては、他本と対照しながら利用することにより、ある和訓の誤写の性質や成立過程を分析することが可能となると大槻（2018）が述べている。

草川（2000）では、同一標出漢字に対する和訓が諸本間で異なるものについては、参考までにその和訓を「↓」印を付与して記した。また、虫損箇所、誤写訓と思われるものについては「(ママ)」印を付与して記入した。本稿では、上記に従って問題訓を抜き出す。

また、調査対象とする問題訓の分類は中村（1987）と西端（1971）の分類を参考に、崩した字体偏旁などが似ている別仮名に誤って写したものを「誤読誤写例」と呼ぶことにする。本来の字義と関係のない別訓、特に上下字の訓と左右の傍訓を誤入するものを「別訓

錯入例」と呼ぶ。さらに、採録に当って訓の一部が脱落したり、移記に際して上下仮名の位置を誤って記入したりするものを「不完全訓・誤訓例」と呼び、これらに当てはまらない用法を「その他」に分類する。

3.2 調査手順

調査手順としては、次のように行う。

①観智院本における問題訓を抽出する。具体的には、正宗（1955）『類聚名義抄 仮名索引・漢字索引』を参照しつつ、草川（2000）の『五本対照 類聚名義抄和訓集成』を中心に、問題訓を抜き出して問題訓一覧表を作る。

②問題訓について、改編本系との比較と量的検討を行う。

③問題訓を分類する上で、改編本系をそれぞれ対校して用例进行分析する。

使用する観智院本の写本は八木書店刊の新天理図書館善本叢書観智院本類聚名義抄である。問題訓例を対校するにあたっては、観智院本を中心として、高山寺本類聚名義抄（以下、高山寺本と略称）、鎮国寺国神社蔵本類聚名義抄（以下、蓮成院本と略称）計三種の写本<sup>ii</sup>をそれぞれ対象とする。さらに、問題例に対して正しい形を確認するため、新撰字鏡<sup>iii</sup>・字鏡集・大漢和辞典<sup>iv</sup>を参照する。

4 問題訓に関する量的検討

本章では、観智院本における問題訓の記載状況、改編本系四本とも掲出する和訓における問題例、また分類による記載状況について、観智院本の問題訓に関する量的検討を行う。

4.1 観智院本の記載状況

本稿では、『五本対照 類聚名義抄和訓集成』を利用し、観智院本における問題訓を調査した。表1のように示しており、計 35,385 語のうち、出現した問題訓の総数は 190 語だった。各篇目の用例数から見ると、仏篇が 142 例と最も多く、法篇が 32 例、僧篇が 16 例と続く。問題訓の割合から見ると、仏篇は最も高いことが分かる。

表 1 観智院本の問題訓の記載状況

観智院本		和訓総数	問題訓数		問題訓率
仏	仏上	3939	74	142	1.026%
	仏中	4129	44		
	仏下本	4241	17		
	仏下末	1539	7		

法	法上	4098	15	32	0.260%
	法中	4319	12		
	法下	3879	5		
僧	僧上	3642	8	16	0.179%
	僧中	3146	3		
	僧下	2135	5		
				190	0.537%

表からわかるように、問題訓例の分布は仏篇に大きく偏っている。さらに仏篇の中では、仏上の問題訓数が最も多い。仏篇には掲出字数と和訓数の多い部首が集中しており、問題訓も多くなるということは考えられるが、他の篇目にも無視できないほどの問題訓が存在する。仏上はほかの改編本系の諸本が現存するので、比較的に問題訓を指摘しやすいことは原因の一つであると推測している。

#### 4.2 改編本系に共通する和訓の記載状況

改編本系四本とも掲出する和訓における問題例を調査し、表2のように示している。表2を見ると、観智院本は24例であり、相違する和訓について蓮成院本は6例、高山寺本は2例、西念寺本は9例である。このことから、改編本系四本のうち、観智院本に多くの問題訓が存在することが確かめられた。

表2 四本とも掲出する和訓における問題例の記載状況

	観本	蓮本	高本	西本
一「人」	5	2	1	3
三「𠂔」	9	1	1	4
四「匸」	2	1	0	0
五「走」	2	0	0	0
六「麦」	0	0	0	0
七「一」	2	1	0	0
八「丨」	0	0	0	0
九「十」	1	0	0	0
十「身」	1	1	0	1
十一「耳」	1	0	0	1
十二「女」	1	0	0	0
計	24	6	2	9

草川（1982）は成立年代が新しいほうが古いほうの誤りを訂正、さらに増補したと考えるのは自然な考え方と言えようが、両本に多くの誤字の例が見られる点からすると、一方が他方の誤りを訂正した上で書写したものとは言えないと指摘した。したがって、和訓の誤字の多寡に応じて成立年代の前後を断定することは困難である。

#### 4.3 分類による記載状況

本稿では、西端（1971）と中村（1987）を参考に以下のように分類し、表3のように示している。

（一）誤読誤写例：崩した字体偏旁などが似ている別仮名に誤って写したもの。

（二）不完全訓・誤訓例：採録に当たって訓の一部が脱落したり、移記に際して上下仮名の位置を誤って記入したりするもの。

（三）別訓錯入例：本来の字義と関係のない別訓、特に上下字の訓と左右の傍訓を誤入するもの。

（四）その他

表3から見ると、(1)の「誤読誤写例」が115例と最も多く、次いで、「不完全訓・誤訓例」35例、「別訓錯入例」9例と続く。「誤読誤写例」が最も普遍的な問題訓である理由を考えると、書写者は単なる不注意で仮名の形を誤写する可能性があるものの、知識不足で漢字と和訓の関係が分からないまま仮名を写す可能性が示唆される。

表3 観智院本の和訓における問題訓の出現数

類別	仏	法	僧	問題訓数	
(一)	86	22	7	115	60.5%
(二)	25	5	5	35	18.5%
(三)	6	1	2	9	4.7%
(四)	25	4	2	31	16.3%
計	142	32	16	190	

#### 4.4 まとめ

本章では、『五本対照 類聚名義抄和訓集成』を利用し、観智院本における問題訓を調査した。

観智院本の問題訓の分布は仏篇に大きく偏っている。仏篇の中には、仏上の問題訓数が最も多い。それに対し、法篇と僧篇の問題訓は相対的に少ない。仏上は他の改編本系の諸本が現存するので、諸本間の参照が可能であり、比較的に問題訓を指摘しやすいことは原因の一つであると考えている。改編本系四本とも掲出する和訓における問題例については、観智院本に多くの問題訓が存在することが明らかになった。問題訓の分類については、「誤

読誤写例」と「不完全・誤訓例」は約 8 割であることが特徴的である。近似字形の違いと語内部の誤写が最も普遍的な問題訓であると推測できる。

## 5 問題訓に関する質的検討

本章では、観智院本における問題訓を分類した上で、(一)の誤読誤写例と(二)の不完全訓・誤訓例を中心に、それぞれの問題訓例を挙げて分析し、観智院本の問題訓に関する質的検討を行う。

### 5.1 誤読誤写例

「僧 カハラグ(ヤハラグ)」、「像 マタリ(ニタリ)」、「投壺 ホボナゲ(ツボナゲ)」のように、「イーク」、「カーナーヤ」、「ホーツ」、「マーニ」など字形の類似が誤写の原因となっていることがよくある。また、「牛(物)ーウシ」のように略字と似ている字形に誤読し和訓を誤って書写する場合もある。大概(2018)によると、観智院本には片仮名で現行と異なるのは、才(オ)、𠂔(キ)、爪(ス)、せ(セ)、子・余(ネ)、乃(ノ)、𠂔口丨・小(ホ)、与(ヨ)、禾・口(ワ)などである。また、メ(反)、谷(俗)、立(音)、牛(物)などの略字も用いられる。

表 4 誤読誤写訓の傾向を示す部分

ウーフ	2	シーミ	1	ナーホ	1	ミーア	1
ウーヲ	2	シール	1	ニーマ	3	ムーシ	1
オーウ	1	シーヲ	1	ニーミ	1	ヤーア	4
オーホ	1	スール	1	ヌーメ	2	ヤーカ	8
カーア	4	ソーク	1	ネーワ	1	ユーエ	1
クーイ	6	ターカ	3	ノーイ	1	ヨーヒ	3
クーウ	1	ターフ	1	ノーク	4	ヨーラ	3
クーカ	1	チーテ	4	ヒーレ	1	ラーシ	1
クータ	5	チーワ	2	フーオ	1	ラーヲ	1
クーユ	1	ツーサ	1	フーク	1	リーク	1
クール	1	ツーホ	2	フース	1	ンーシ	1
ケーチ	2	テーナ	1	フーラ	3	禾ーネ	4
サーソ	1	ナーオ	1	ホース	1	物ーオ・ウシ	5
シーソ	1	ナーチ	2	マーナ	3	行ーノイ・クキ	2

表4は誤読誤写訓の傾向を示す部分の数を集計したものである。誤読誤写訓の傾向を示す部分に右と左の位置は区分しない。例えば「ウーフ」と「フーフ」は同じく「ウーフ」にする。表からわかるように、「ヤーカ」の誤写が相対的に多く8例であり、「クイー」と「クータ」が6例と続く。また、物の略字「牛」を誤って「オ・ウシ」に書写した例も多くある。

誤読誤写訓の成立過程を明らかにするために、比較的わかりやすいものに限り、出現数最も高い誤読誤写の傾向を示す部分からそれぞれの例を示す。<sup>v</sup>（観は観智院本、蓮は蓮成院本、高は高山寺本を表す。以下同様。）

### 5.1.1 ヤーカ

#### (1) 「僧」ヤハラク

【観】「僧〈蘇曾反 カハラク〉 ネムコロ サトル 和音ソウ」(仏巻024頁1行3段)

【蓮】「僧〈蘇曾反 ヤハラク〉 ネムコロ サトル 和音ソウ」(上一一オ4)

【高】「僧〈蘇曾反 ヤハラク〉 ネムコロ サトル」(巻上3オ)

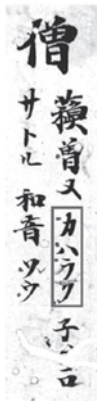


図1 観智院本「僧」

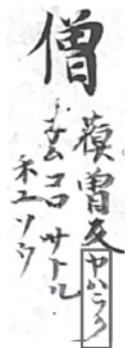


図2 蓮成院本「僧」

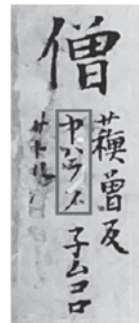


図3 高山寺本「僧」

僧字に対する『大漢和辞典』の記述を示す。

僧 1117 ㊦〔集韻〕思登切

㊦〔集韻〕慈陵切

㊦○梵語の僧伽 (Samgha) の略。和・衆等の意。仏道に入って道を修めるものの称。本来は三人乃至四人以上の比丘をいふ。後、一人にもいふ。〔説文新附〕僧、浮屠道人也、从人曾声。〔広韻〕僧、沙門也、梵音云僧伽。〔正字通〕僧、從浮屠教者、或称上人、梵語僧伽邪三合音、今俗取一字、名曰僧。〔僧史略、下〕若単曰僧、則四人



已上、方得<sub>レ</sub>称<sub>レ</sub>之、今謂<sub>レ</sub>分称<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>僧、理亦無<sub>レ</sub>爽。㊦心やすからざるさま。僧倭。〔集韻〕僧、僧倭、不<sub>レ</sub>寧也。㊦姓。姓。〔尚友錄〕僧、太原、角音。

加藤（2017）によると、㊦㊦の説明のうち、「和・衆等の意」が僧という漢字自体の意味であればそのままヤハラグという和訓に結び付くのであるが、これは僧という漢字本来の意味ではなく、梵語 Samgha の持つ意味であり、それが音訳漢字熟語「僧伽」の意味となり、さらにその省略単字形である僧の意味となったということらしい。したがって、①梵語 Samgha の有する「和合衆」の意味が→② Samgha の音訳漢字「僧伽」の意味とされ→③「僧伽」が単に「僧」と略されて使用されたことから、僧という単字にも「和合衆」の意味があるとされ→④観智院本類聚名義抄で僧字に「和合衆」という意味に関係のあるヤハラグ・ネンコロという和訓が付された、ということになると推測している。

『新撰字鏡』においては、僧字の意味が「之尼也 合衆」と説明され、その尼字には「和也 定也 近也 安也 愛也」とある。これらのことから、僧字はなぜ「和」に該当する「ヤハラグ」という和訓が付されているかは説明できる。原本のテキストを見ると、やはり蓮成院本と高山寺本は「ヤハラグ」となり、観智院本は「カハラグ」となっている。転記する際に「ヤ」を「カ」に誤読し、間違えて「カハラグ」と書写した可能性が高いと考える。

### 5.1.2 クーイ

#### (2)「觀」クハシ

【観】「觀〈力戈反 音乱 一縷 禾曲 ツマヒラカ イハシ〉」（仏巻 199 頁 7 行 4 段）

【蓮】「觀〈力戈反 又音乱 一縷 委曲 ツマヒラカ クハシ〉」（上一五九オ 6）

【高】「觀〈力戈反 又音乱 一縷 委曲 ツマヒラカ クハシ〉」（巻上 91 オ）

觀字に対する『大漢和辞典』の記述を示す。

觀 34962 ㊦〔集韻〕盧戈切

㊦〔集韻〕盧玩切

㊦力轉切

㊦㊦㊦うれしげに見る。㊦くはしい。委曲。觀縷。㊦ついで。次序。觀縷。㊦誤って羅に作る。㊦みるさま。

蓮成院本・高山寺本・『字鏡集』に「クハシ」という記載があり、さらに『大漢和辞典』においては、觀字の意味は「㊦くはしい。委曲。觀縷」と説明され、観智院本の「イハシ」は「ク」の誤写であると推測できる。テキストを比較すると、蓮成院本と高山寺本は全く同じだが、それに対し観智院本では「觀」字の音注の「又」が脱落しており、改編本系の諸本に相互の改編も存在することが分かる。しかし、書写者が転記する際に、どれほどの専門知識を把握していたのが問題となる。単に各項目の機能・基礎情報を理解していた

のか、それとも漢字注と和訓注の文意まで理解していたのかという点についてはより多くの例を検討する必要があると考える。観智院本で「観」字の記述から見ると、観智院本の書写者は、片仮名の「イ」に誤り、「クハシ」の文意を理解しないまま「イハシ」に書写してしまったものと推測する。

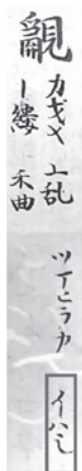


図4 観智院本「観」

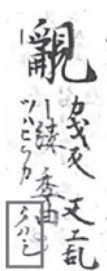


図5 蓮成院本「観」

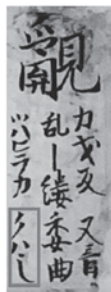


図6 高山寺本「観」

### 5.1.3 略字

(3) 「例」モトヨリ

【観】「例／例〈音勵 ツネナリ トモカラ ナラフ イカル モトノイ〉」(仏巻 045 頁3行1段)

【高】「例／例〈音勵 ツネナリ トモカラ ナラフ イカル モトヨリ〉」(巻上18ウ)  
例字に対する『大漢和辞典』の記述を示す。

例 587 □〔集韻〕力制切

□〔集韻〕力槩切

□○たぐひ。ためし。或は例(1-819)に作る。○しきたり。引用典故。○おほむね。大部分。みな。④或は列(2-1901)に作る。⑤姓。□さへぎる。列(2-1901)・遡(11-38837)に通ず。□たとへば。名乗ツネ。タダ。ミチ。トモ。

『大漢和辞典』においては、例字の意味が「○しきたり」と説明され、その「しきたり」は意味上でモトヨリという和訓に結び付くことが妥当である。これらのことから、例字になぜモトヨリという和訓が付されているかは説明できる。また、略字と似ている字形に誤

読み和訓を誤って書写する場合がある。草川（2002）では「ヨリ」を「イ」に略して書く場合があるため、観智院本への転記する際に「イ」を分離して「ノイ」に誤写する可能性があると考えられる。

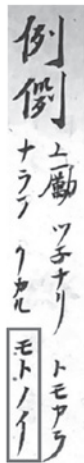


図 7 観智院本「例」

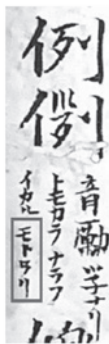


図 8 高山寺本「例」

5.2 不完全訓・誤訓例

本節では、不完全訓・誤訓例の考察を行う。不完全訓・誤訓例には、さらに二種類に分けられる。

表 5 不完全訓・誤訓例数

	仏	法	僧	計
(A)	15	3	2	20
(B)	10	2	3	15
計	25	5	5	35

表5で示されているように、「儼 タヒニ（タカヒニ）」「偕 ナラ（ナラフ）」などのように訓の一部が脱落したのは20例であり、「裸 ハカタ（ハタカ）」「量 ハルカ（ハカル）」などのように、移記に際して上下仮名の位置を誤って記入したものは15例である。表からわかるように、不完全訓・誤訓例の分布は仏篇に大きく偏っている。仏篇には掲出字数と和訓数の多い部首が集中しており、問題訓も多くなるということは考えられるが、他の

篇目にも無視できないほどの問題訓が存在する。次に、それぞれの例を挙げて分析していきたい。(A)は訓の一部が脱落したもの、(B)は仮名位置が転倒したものを示す。

### 5.2.1 訓の一部が脱落したもの

(4)「徊」タチモトホル

【観】「徊〈正 ワカル タチモトル〉」(仏巻 062 頁 7 行 3 段)

【高】「徊〈正 禾カル タチモトホル〉」(巻上 22 ウ)

徊字に対する『大漢和辞典』の記述を示す。

徊 10095 〔集韻〕胡隈切

○さまよふ。たちもとほる。すすまない。○花の名。

図 9 観智院本「徊」

図 10 高山寺本「徊」

このうち「○さまよふ。たちもとほる。すすまない」は高山寺本の「タチモトホル」と同様に「徊」にあたるが、観智院本の「タチモトル」は「ホ」の脱落であることが分かる。しかしながら、観智院本の仏巻 062 頁 7 行 1 段には「徘徊〈見人部 タ、スム タチモトホル〉」という熟語があり、書写者は前後の項目を参照しつつ転記作業を進めていたのであれば、「ホ」の脱落は避けることができたはずである。この例から見て、現実には転記作業が機械的に行われていたことが分かる。

### 5.2.2 仮名位置が転倒したもの

(5)「覺」タシカ

【観】「覺〈音角 サトル アラハル タ、シ オホキナリ オホユ オモフ タカシ〉マコト クラシ ムカロ 又音教 サム ウツ、 又呉音按 シル」(仏巻 199 頁 1 行 4 段)

【蓮】「覺〈音角 サトル マコト クラシ ムクロ タシカ アラハル オホキナリ 又音教 サム ウツ、 タ、シ オホユ オモフ 呉又按 シル タシカ〉」(上

一五九オ)

【高】「覺〈音角 サトル アラハル オホキナリ タ、シ オホユ オモフ マコト クラシ ムクロ **タシカ** 又音教 サム ウツ、 呉音校 シル〉」(巻上 90 ウ)

覺字に対する『大漢和辞典』の記述を示す。

覺 6824 ㊦〔集韻〕訖岳切

㊦〔集韻〕居效切

㊦○さとる。悟了する。○さとす。ひらく。さとらせる。さとり。道理をしること。

㊦悟りをひらいた人。道理をしりえた人。ひじり。達者。㊦さとい。㊦おぼえる。知る。㊦感じる。㊦あらはれる。㊦あらはす。明らかにする。㊦高く大きい。㊦なほい。まつすぐ。㊦くらべる。きそふ。㊦○さめる。めざめる。○さます。おこす。㊦うつつ。

現実。㊦○おぼえる。記憶する。○おぼえ。㊦記憶。㊦信頼。好感。㊦おぼえがきの略。

覺  
上角 サトル  
オホキナリ  
オホユ  
オモフ  
マコト  
ムクロ  
タシカ  
又音教  
サム  
ウツ  
呉音校  
シル

図 11 観智院本「覺」

覺  
上角 サトル  
オホキナリ  
オホユ  
オモフ  
マコト  
ムクロ  
タシカ  
又音教  
サム  
ウツ  
呉音校  
シル

図 12 蓮成院本「覺」

覺  
上角 サトル  
オホキナリ  
オホユ  
オモフ  
マコト  
ムクロ  
タシカ  
又音教  
サム  
ウツ  
呉音校  
シル

図 13 高山寺本「覺」

『大漢和辞典』においては、覺字の意味が「㊦あらはす 明らかにする」と説明され、その「明らかにする」は意味上でタシカという和訓に結び付くことに妥当性がある。また、『字鏡集』を参照してみると、蓮成院本と高山寺本の「タシカ」の方が正しいことが分かる。

### 5.3 問題訓と和訓の汎用性

ここまでの調査では誤読誤写例と不完全・誤訓例の15例を抽出して分析してきた（本稿では5例を挙げた）。上記のように、『大漢和辞典』の記述にあたる用例、もしくは『大漢和辞典』により和訓注が確定できる用例は、15例のうち6例のみである。『大漢和辞典』に記載されている和訓の汎用性が高いことが理解できるが、それに対して、記載されていない和訓の汎用性は相対的に低く、『類聚名義抄』の和訓注として収録・転記される際に問題訓になる傾向があり、問題訓と和訓の汎用性の間に何らかの関係があるのではないだろうかと考えられる。

問題訓と和訓の汎用性の対応関係を確認するため、仏篇「人部」の問題訓をサンプルとし、『大漢和辞典』を利用しながら調査を行う。「人部」の問題訓は41例ある。それぞれの掲出字について『大漢和辞典』と対応するものは37例があった。これを整理すると、掲出字41字、和訓11語の対応があることがわかった。表6にその一部を示す。

表6 字訓対応（一部）

	掲出字	和訓注	大漢和辞典
1	僧	ヤハラグ	①和・衆等の意。
2	倍	イヨイヨ	⑤ますます。いよいよ。
略	略	略	略
40	倦	オコタル	①うむ。あきる。おこたる。なまける。
41	假	ノホル	×

まず、表6の字訓対応を用いて記載状況を確認する。例えば、『類聚名義抄』の「倍」には和訓注に「イヨイヨ」がある。『大漢和辞典』の「倍」には「⑤ますます。いよいよ。」が記載されており、この場合は「イヨイヨ」が『大漢和辞典』の記述にあるためこの和訓との対応関係があるといえる。一方、「假 ノホル」の方には対応する記述がないため、この段階では対応関係は確認できない。

上のように『大漢和辞典』の和訓記述によって確認できる対応関係の他に、出典と意味解釈として記載される部分の対応関係も存在するものと考えられる。たとえば、『大漢和辞典』の「僧」には「和・衆等の意」がある。「僧」と「ヤハラグ」の対応関係は確認できないが、「和・衆等の意」には「和」があり、このことから「僧」と「ヤハラグ」が関連付けられる。

以上の方法で『大漢和辞典』の記述と和訓の対応を採っていくと、「人部」の問題訓で41例の対応が確認できた。「人部」の対応率は26.8%であり、対応なしと記載なしの和訓数との比率は次の表の通りである。

表 7 『大漢和辞典』対応状況

	和訓数	比率
対応あり	11	26.8%
対応なし	25	63.4%
記載なし	5	9.8%
計	41	100%

「人部」の対応率が低く、対応なしの問題訓は 63.4%であることは注目に値する。対応なしの問題訓と記載なしの問題訓は約 7 割であり、前述のように、『大漢和辞典』に記載されている和訓の汎用性が高く、記載されていない和訓の汎用性は比較的に低いことが理解できる。したがって、和訓の汎用性が低ければ低いほど転記・書写する際に問題訓になりやすいという傾向がある。しかしながら、『類聚名義抄』は『大漢和辞典』における親字の出典の一つであるものの、同時代の辞書ではないため、それ以外の資料はどのような結果が出るのかという点についてはまだ明らかではない。ほかの資料を参照する必要がある。

この点を補うため、『類聚名義抄』の改編に用いられている『新撰字鏡』を利用してさらに字訓の対応を確認した。調査の結果、17 用例で対応が確認できた。対応なし問題訓数と割合を次の表に示す。

表 8 『新撰字鏡』対応状況

	和訓数	比率
対応あり	17	41.5%
対応なし	18	43.9%
記載なし	6	14.6%
計	41	100%

『大漢和辞典』の結果と違い、対応するものはそれなりに見えた。一方、対応なしと記載なしの和訓数は半数を超えたため、記載されていない和訓を転記・書写する際に問題訓になりやすいという傾向があることは、調査結果と矛盾しないと考えられる。『大漢和辞典』の対応率と比べてみると、『新撰字鏡』の方が高い。さらに、和訓注によって確認できる対応関係はほとんどない。それに対し、漢文注として記載される部分の対応関係は多かった。大槻（2019）によると、和訓が見える項目の割合は、『新撰字鏡』全体でおおよそ 15%となる。したがって、漢文注によって確認できる対応関係は多かったことが理解できるが、『新撰字鏡』において、問題訓と和訓の汎用性の関係を検証するために、ほかの部首の問題訓の対応関係を確認することはもちろん、問題訓以外の和訓について、その

対応関係を検討する必要がある。

#### 5.4 まとめ

本章では、観智院本における問題訓を分類した上で、それぞれの問題例を挙げて分析した。そして『大漢和辞典』を用いて、問題訓とその汎用性の関係について調査を行った。その結果、転記作業が機械的に行われていた可能性があることが明らかになった。また、「人部」の対応状況が確認し、和訓の汎用性が低ければ低いほど問題訓になりやすいという傾向があることも明らかになった。

### 6 終わりに

本稿では、今まで全体的な調査が行われていなかった観智院本『類聚名義抄』の問題訓について改編本系と比較を行い、その量的・質的検討を考察してきた。その調査結果によって、次の二点が明らかになった。

(1) 問題訓に関する量的検討については、各篇目の問題訓数より、仏篇が最も多いことがわかる。その原因は、仏篇には掲出字数と和訓数の多い部首が集中していることである。また、書写者の専門知識レベルによって誤写する可能性もあると推測している。

(2) 問題訓に関する質的検討については、各用例の誤写原因と成立過程を分析したところ、観智院本の書写者が和訓の意味を理解しないまま、転記作業を機械的に行っていたことが原因の一つであることが明らかになった。さらに、「人部」の問題訓と『大漢和辞典』の記載との対応調査を行った結果、和訓の汎用性が低ければ低いほど問題訓になりやすくなるということも明らかになった。

残る課題としては、観智院本『類聚名義抄』における問題訓として分析できず残った和訓の考察と、和訓を中心にその内部的構造を分析すること、例えば掲出和訓の優先順位などである。前者については、原撰本系・改編本系と対照し和訓を抽出することで、改編本系の前後関係の解明に利用できる可能性がある。後者については、『色葉字類抄』などの資料を用いて調査を行う余地がある。

問題訓を手掛かりとした検討からは、観智院本『類聚名義抄』を一次資料としての利用にあたって見直すことができる。今後の『類聚名義抄』研究の基礎として活用できるだろう。

#### 参考文献

- 池田証壽 (1994) 「類聚名義抄の出典研究の現段階」『信州大学人文科学論集』28 信州大学文学部 pp.23-31
- 池田証寿 (2008a) 「観智院本類聚名義抄の掲出項目数と掲出字数」『北海道大学文学研究科紀要』124 北海道大学 pp.137-151



- 池田証寿 (2008b) 「漢字字体研究のための日本古字書データベースの作成－観智院本『類聚名義抄』を例に－」『情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ』8 情報処理学会 pp.35-42
- 大槻信 (2018) 「『類聚名義抄観智院本』解題」八木書店
- 大槻信 (2019) 『平安時代辞書論考：辞書と材料』吉川弘文館
- 岡田希雄 (2004) 『類聚名義抄の研究』勉誠出版
- 加藤浩司 (2017) 「観智院本類聚名義抄の千字和訓ワレと僧字和訓ヤハラグ・ネンコロおよび僧字の成立について」『都留文科大学研究紀要』85 都留文科大学 pp.45-58
- 草川昇 (1982) 「改編本系名義抄相互の関係－標出文字・和訓の面からの一考察（遠藤嘉基博士喜寿記念特輯号一下）」『訓点語と訓点資料』68 訓点語学会 pp.163-179
- 草川昇 (1990) 「『類聚名義抄』小考 その一」『名古屋女子大学紀要』36 名古屋女子大学 pp.253-262
- 草川昇 (2000) 『五本対照類聚名義抄和訓集成』汲古書院
- 草川昇 (2002) 「『五本対照類聚名義抄和訓集成』(全四巻)を出版して」『相愛女子短期大学研究論集』49 相愛女子短期大学 pp.112-132
- 中田祝夫 (1955) 「類聚名義抄使用者のために」『類聚名義抄 仮名索引・漢字索引』風間書房
- 中村宗彦 (1987) 「類聚名義抄和訓の定位」『国語国文』56 京都大学文学部国語学国文学会 pp.14-28
- 西端幸雄 (1971) 「類聚名義抄における誤写の考察」『訓点語と訓点資料』45 訓点語学会 pp.37-54
- 西端幸雄 (1973) 「類聚名義抄における誤写の諸例」『訓点語と訓点資料』52 訓点語学会 pp.31-72
- 正宗敦夫 (1955) 『類聚名義抄 仮名索引・漢字索引』風間書房

## 使用テキスト

- 図書寮本類聚名義抄 『図書寮本類聚名義抄：本文影印 解説索引』勉誠社 1976
- 観智院本類聚名義抄 『類聚名義抄：観智院本』八木書店 2018
- 蓮成院本類聚名義抄 『三寶類聚名義抄：鎮国守国神社蔵本』勉誠社 1986
- 大漢和辞典 『大漢和辞典』大修館書店 1955
- 字鏡集 『字鏡集 白河本寛元本研究並びに総合索引』中田祝夫・林義雄 勉誠社 1978
- 新撰字鏡 『新撰字鏡 天治本享和本群書類従本 増訂版』臨川書店 1967

ーりん・ちゅうい、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期在学ー

<sup>i</sup> 改編本系『類聚名義抄』の編者は未だ不明であり、さらに改編作業は編者の人数、進行状況、専門知識のレベルによって大きく影響されると推測している。

<sup>ii</sup> 本稿は観智院本・高山寺本・蓮成院本・西念寺本を用いて調査を行う。宝菩提院本は対照資料としない理由としては、宝菩提院本は「舟」から「犬」までの10部のみが残されるほか、虫損がひどく判読困難な箇所が多く、対照しにくいことである。

<sup>iii</sup> 『新撰字鏡』は平安時代に僧侶昌住が編纂された漢和辞典であり、現存する漢和辞典としては最古の

ものである。主要出典は『一切経音義』『切韻』『玉篇』であり、また、改編本系『類聚名義抄』『字鏡集』に大きく影響している。

<sup>iv</sup> 『大漢和辞典』は親文字5万余字、熟語53万余語を収録した世界最大の漢和辞典である。本稿では、問題訓の正しい形を確認することにあたって便宜的なものに過ぎないため『大漢和辞典』を参照する。しかしながら、『類聚名義抄』は『大漢和辞典』における親字の出典の一つであるものの、同時代の辞書ではないため、『新撰字鏡』を参照するほか、今後は三巻本『色葉字類抄』などの辞書を参照する必要がある。

<sup>v</sup> 改編本系をそれぞれの問題訓を比較する際に、たまたま同じ箇所でも同じ誤写が存在するが見当たるため、それらに何らかの前後関係があることを期待されるものの、実際に諸本間の関係が見えて来なかったようである。今後は今回の調査結果を材料提供の一つとし、さらに諸本間の系統関係を検討したい。